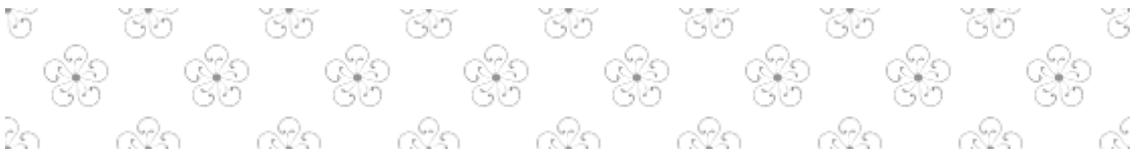




梅含む



急に春らしい陽気になった二月の下旬、毎度母に付き添って出かける大学病院の丁度その日、駐車場がいつもに増して一杯で、病院の裏手の職員用の駐車場に誘導された。ついてない・・・と思いながら、裏庭を横切ろうとした時、大きな三角錐の石碑に目が止まった。「献体碑」医の礎にと献体された方々のために・・・と建てられた碑。その存在感の大きさに圧倒されながら、私はその碑に刻まれた文字を改めて見詰めた。

日本で初の献体者は遊女であった。

その事を私が知ったのは、渡辺淳一の「白き旅立ち」によってである。

二十年以上も前になるが、その当時から私には遊女という言葉にビビッと胸の琴線が触れるというか、まるで自分の前世が遊女であったのでは・・・と思うふしさえあり、その時も本屋で何気に手に取った文庫本の裏表紙にあった、日本で初の献体者は遊女であった。という文字に一も二もなくその本を購入したのだ。

冒頭で著者も語っている、献体が世に広まった現在ならともかく、江戸末期を生きた遊女が、何故当時の誰もが考えなかったであろう、日本初の腑分志願者になり得たのか・・・行き倒れや咎人というのではなく、何故遊女という身の上でありながら自分で腑分を願い出たのか・・・この遊女「美幾」に私もなみなみならぬ興味を持って向かい合った。

駒込生まれの美幾は十六歳で販夫（小荷物運搬業）をしていた父が怪我で働けなくなったことから吉原に売られた遊女だった。

どこか冷めたところのある美幾は廓でも、直にその世界で住むという事の意味をすべて受け入れ、お職を張るほど売れる遊女でありながら、それを望まず、夢や欲望さえ冷やかに胸の内から追い出して廓世界にひっそりと暮らす女だった。

その彼女を献体と結びつけたのは、彼女の馴染みであった宇都宮鉦之進という一人の武士である。美幾の元へ訪れる度に、自分がどのような事をしようとしているのかを熱っぽく





語り、美幾も普通の武士とはまったく違う鉦之進に好意を寄せていたようだ。ひとつ年上の鉦之進は廓の外の斬新な風を送ってくれる、恋や愛という感情ではないようにも思えるが、美幾にとって鉦之進は自分を人間として扱ってくれた初めての男であった。

鉦之進は好奇心旺盛な男で、日本のみならず、世界に目を向けた武士として、後世にも名を残しているが、三十になった頃よろけに罹り、足腰がまったく立たなくなった。よろけの原因は不明で、本人は旅先での女遊びの為だと思っていたふしがあり、自分の病気を梅毒によるものと考えていたと思われるが、その実その病気は「脚気」であったと後日わかる。

同じ頃、年季が明けた後も廓に残っていた美幾も重い労咳に侵されつつあった。

鉦之進の友人より彼の病気を知った彼女は鉦之進を見舞う。

下半身が麻痺した鉦之進は、それでも周りの人々の好意のもとに、不自由のない暮らしをしており、美幾の見舞を喜んだが、美幾の労咳がかなり進んでいるのを見抜き、小石川養生所の滝川長安という医師への紹介状を書く。こうして美幾は当時何か月も待たなくては入所出来なかった小石川養生所へ入所する事になるのだ。

生きる事に対してもそれ程食欲でなく、病をも諦めと受け止めていた美幾が、患者の為に分け隔てなく誠意を尽くす長安に、淡い恋心を感じ始める。

十歳も年下の、患者の信望を集めている長安を慕っているなど、遊女上がりの自分が間違っても、口にはいけない。

胸の奥の奥に秘めた、悲しい恋だった。

ある日の診察の時、美幾は長安から鉦之進が腑分志願者の一号となった事を告げられた。

この時の「解剖願ひ書」は現在も残されている。

「宇都宮先生は自ら医学の為に腑分を申し出られました、御立派な方です」

美幾は鉦之進の病がもうどうしようもなく進んでいるのか・・・と案ずると共に、長安が腑分に対して、なみなみならぬ関心と期待を持っている事を知る。

「長安先生は腑分を見たいのですか？」

「見たいです。書物だけではなく、実際に人間の臓物をしっかりとこの目で確かめる事で今まで、治す事の出来なかった病を治す手がかりがつかめるかもしれない。腑分はその意味でも大切な事なのです」

いつになく熱心に話す長安は数か月後に長崎へ旅立つ事も美幾へ告げた。

人の死を待つわけではないが、鉦之進の腑分を見られないだろう事を残念がっている様子も見て取れる。

その日から美幾の心はある思いで揺れ始める。

自分の長安への想いは決して表に現すことの出来ないもの。自分はもうじき死んでしまう。





このまま、一人の遊女がこの世から消えてしまう・・・ただそれだけ。長安もじきにこんな女がいた事さえ忘れ去ってしまうだろう・・・だが、もしもこの身体の隅々までを腑分によって、長安に見てもらえたら、長安の中に自分の記憶が生涯残るのではあるまいか。その思いは病がますます重くなり、歩く事さえままならなくなるにつれ、美幾の中で大きく膨らんで行った。

そしてある夜、美幾は告げる。

「こんな身体でも、腑分出来ますか？先生、私が死んだら、腑分をお願いしたいのです」長安にそう告げた時、長安は驚きを隠さなかったが、美幾の決心が固い事を確認後両手をついて、頭を下げた。そしてやせ細った美幾の身体をしっかりと抱きしめてくれた。美幾の淡い思いが実った瞬間だった。美幾三十四歳、暑い夏の日であった。

こうして美幾は日本初の献体者となったのだ。

志願一号であった鉦之進は、自身の思いとは裏腹に病が完治し、その後数々の功績を残し、結婚もし、結局腑分を実行された記録はない。

美幾は腑分後手厚く葬られ、遊女としては珍しく文京区の墓地に眠っている。

大学病院の献体碑を見ながら、私は美幾を思った。

腑分など忌み嫌われていた時代である。屍とは言え、自分の身体を切り刻まれるなど、想像しただけでも恐ろしい、それでも敢えてそれを願い出た美幾にあったのは、医学に貢献する、医学の礎となる・・・そんな穿った気持ちではなく、ひたすら愛する人に自分を忘れずにいてもらいたい、せめて愛しい人の役に立ちたいと言う思いではなかったか。

それは苦界に身を沈めた女の哀しさではなく、女の潔さ、凜とした強さ、そして何よりも愛するという事を知った女の優しさに他ならない。

そうでしょ、美幾さん・・・

丁度咲き始めた白梅が、まるで美幾が笑ったように可憐に揺れた。



春寒や三角錐の献体碑

みき女てふ遊女の墓や梅含む ゆうこ